

巻頭のことば

『教育学研究室紀要』の12号は、2014年度の教育学研究室の教育・研究活動、特に、前年度に始まった科研費研究「<性>に関する教育の内容構成・教育課程とジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成」の中で生まれた論文や研究ノートの他に、卒業院生たちの寄せてくれた論稿を加え、ボリュームのある号となった。本号は、博士後期課程3年の田中和江と特別研究員の森岡真梨が中心となって編集を進めた。

科研費研究は引き続き、取り組まれており、<性>に関する教育の視点からの教科書分析は、2014年度も国内外ともに進められた。ただし、橋本の論稿は2013年度のドイツ調査をもとに作成されたものである。講義や卒研、博論指導などの合間を縫っての研究活動のため、2014年8月下旬のオーストラリア（パース）調査や、2015年3月の韓国（ソウル）調査などは本号に反映することはできなかった。それらは、来年3月刊行予定の科研費研究報告書の方に委ねたい。

ジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成に関する世代別調査は2014年度も実施され、第一～第五世代までの調査は、ほぼ予定通りの対象者数のインタビューを終えている。第六世代への質問紙調査も実施され、その中間報告的論稿を森岡真梨の研究ノートとして本号に収録することができた。また、今回の科研メンバーである池谷壽夫の論文も私たちの科研研究と密接に進められている池谷個人の研究成果である。このように、個々人は担当分野と関連分野の論文化に取り組んでいるが、今年度は全体にかかわる内容での論文化が大きな課題となっている。

本号には、この3月に卒業していった卒研生の卒論発表のパワーポイントも収録しているが、彼らの多くは家庭科教諭や養護教諭などとして、4月から現場で働いている。また、卒業院生の中には論稿ではなく、近況報告を寄せた者もあり、勤務先で、それぞれ仕事に励んでいる様子が伝えられている。大学院ゼミも現職をもつ院生が含まれるようになって以降、夕方から開かれるようになり、多くの時間を各人の論文のドラフトの検討に当ててきた。澤村文香も現職をもつ院生として、この3年間、博士論文の作成に取り組み、この3月にめでたく博論を提出した。今後の活躍に期待したい。この後に続くようにがんばっている博論作成中の院生とともに、私も気を引き締めて取り組んでいきたい。